
FINALGENERATION Episode 『Fantasiewelt』 “ **極めて近く、限りなく遠い世界に** ”

忠犬ゲッシー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スーパーロボット大戦ORIGINAL GENERATION
Episode『Fantasiewelt』“極めて近く、限りなく遠い世界に”

【Nコード】

N9699R

【作者名】

忠犬ゲッシー

【あらすじ】

アクセル隊長とアルフィミイが幻想入り。

やってみたかった。反省はしていない。

THE LAST JUDGMENT

宇宙――

静寂な世界――

宇宙――静寂でなければ――

「望んでいない……世界……」

『L5宙域』

そう呼称される宇宙空間は、“ある戦い”による残滓たる機動兵器――『PT』や『AM』の残骸を周囲に漂わせ、異様なまでの静けさを齎している

「……望んでいない……世界……修正……」

死者の念も、声も無い、どこまでも静寂で――ある種の心地よさまでも感じさせる、“純粹たる者たち”の求めた“静寂たる世界”に近い、静けさだった

「……でも……それは……間違つて……いる……」

人の意思と意思とがぶつかり合い、結果生まれくる“混沌の世界”を修正する――

“純粹たる者たち”は望まない世界を修正しようとした

「人の想い……世界を変える……想いの……“力”……」

『アインスト』

自らをそう名乗る“純粹たる者たち”は、争いを拡大させ“混沌の世界”を造る人間を襲撃。

世界を修正し、真の“純粹な存在”を目指した

だが――

「間違つて……いる……？わからない……私には……私には……もう……何も聞こえない……」

人の根本にして基本、その“新しい命”の誕生……

『アインスト』は、それが解らなかった。

サンプルとして、地球人の軍隊——『地球連邦軍』——の士官候補生達の乗るシャトルに自らの眷属を激突させ、乗っていたある士官の一人を蘇生。

その経過を見守ると共に、その蘇生した女性を基に人間達を調べるための“ある存在”を創り出した

「……私は……消える……そう……私が居るべき……場所は……どこにも……ない……から……」

その存在は、蘇生した女性の所属する部隊や構成員達に幾度となく襲い掛かり、時が経つにつれその存在の力と明確な自我も強まっていた

「……………」

やがてその存在は、女性の恋人にして女性の所属する部隊の隊長に——その女性の心のコピーだとしても——好意を抱き、初めて自分の心を手にした

「これ……は……想いの力……静寂を乱す……」

そして、最終的には自らを創り出した創造主に反旗を翻し、その女性や構成員・戦友達と共に創造主を破壊。

『アインスト』は、生命の誕生の仕組み——男女の生物学的な繋がりを理解出来ず、崩壊。

眷属達と、その存在も創造主と同じ命運をたどることとなった。

最後に“人の想いの力”を垣間見たその存在も、ただ朽ち行く運命……

その、はずだった

「違う……静寂を……望む……意思の力……」

その存在は、『L5宙域』にて漂うひとつ——燃え尽きる、陽炎の様に小さな“人の意思”を見つけた

「……う……？」

その漂う残骸に乗る青年は、暫く失っていた意識を回復させ、小さく嗚咽を漏らす

「ここは……？」

ようやく自分の状況に気付き、自分の居る宙域を確認し、次いで自

分の乗る機動兵器の状態を確認する

「モニターは……一応、生きてるか」

自分が戦闘していた自動惑星『ネビーイム』とは別の場所でもまだ生きていることを認識した

「……ソウルゲイン……思ったより丈夫だったらしい……」

自分の乗機の頑丈さに改めて舌を巻く。が――

「DFS……DALS……再起動………無理、か」

やはり、内部系統は無事ではなく、乗機の生命線とも言える二つのメインシステムは作動しない。

しかも――

「ぐっ……！？がはッ……」

青年の身体もまた、著しく傷付いていた

「フッ……おれの身体も……駄目……だな、こいつは」

年齢に不相応の落ち着きで、諦観したように青年は自嘲する。

もう、身体は保ちそうになかった

「内蔵破裂は………確実か。それに手足も………このザマ………」

戦闘していた敵——彼が『ベーオウルフ』と呼び敵視していた『A
TXチーム』隊長“キヨウスケ・ナンブ”

彼の駆るカスタムタイプの『PT』“アルトアイゼン・リーゼ”の
猛攻による傷は、青年の乗機、青年の身体を深く蝕んでいた。

その証拠が、先程の彼の口上である

「……………」

死を覚悟した彼は、静寂な宇宙空間の静けさに浸るように、静かに
呟き始めた

「……静かだ。……レモン、静寂が日常である世界………案外………悪
くはないようだ………終わる時は………まともな死に方をするとは………」

思って……いなかったが……」

青年が所属していた部隊の目指した“闘争が日常である世界”——平和の後に待つのには緩やかな腐敗による腐った世界。そんな世界にしないため、常に戦争が続く世界——理論上というよりは確率の問題のこの世界を創りあげるため、闘争に明け暮れた、戦闘隊長の彼は、その世界を否定したかつての部下の一人と、“キヨウスケ・ナンプ”達との戦いに敗れ、この結果である

「レモン……おれは……贅沢者だ……な……」

最後に恋人の名を口にし、青年は再び沈黙した

「……………」

消え行こうとしていたその存在は、青年の乗る機動兵器の残骸へと意識を飛ばした

「消えかけた……命……消えかけた……私……」

一縷の望み——

最後に手にした意識を、命をまだ紡ぎ取れるかもしれない……

「世界を……変える……想いの力……あなたが強く……想う……
……哀しくて……温かい……力」

その存在は、青年に更に意識を集中する

全ては――

「私が……私であるために……」

その存在は、遂にその意識を青年の身体に触れさせた

「あなたの想いの力……お借り……致しますの……」

久しく忘れていた口調を蘇らせ、青年とその存在の意識が共鳴する

「……レモ……ン……？」

沈み行く意識の中、青年は恋人によく似た女の声を聞き、その意識を完全に閉じた。

静寂を望む心……

その心を満たす世界……

ようこそ——『幻想郷』へ

拾う神あらば

「……これね？」

「は……はひ……」

『迷いの竹林』と俗称されるそこに、二つの人影が在る。

否、ひとつは“人影”と呼称すべきかどうかに疑問を覚えさせるかのように、“人間には不相応”な物が頭部から伸びている

「ひ……人里に向かう途中にいきなり聞こえた落下音を辿って見つけたんですけど、こんな物見たことありませんよ……」

長く、腰まで伸びた薄い紫色の頭髮

紺色のブレザーにピンク色の短いスカート

そして、頭頂部から双方向に伸びる白い獣耳

俗に“うさ耳”と呼ばれる物を持つ少女が、焦燥した様子でもうひとつの人影に言葉を投げた。

もうひとつの人影は、対照的に冷静に応えた

「当たり前でしょう。“突如現れた”のなら、“外の世界”の物体なんでしょうけど……酷い状態ね」

左右に赤と青に分かれて色塗りされた奇怪な服装
同じように腰まで伸びた白い髪を三編みにした髪型

獸耳の少女より長い背丈の女性は、眼前に聳える“それ”の状態を見、眉を顰めた。

現れた“それ”――

所々に溶解したような跡や何かで撃ち抜かれたような穴跡。

“それ”が元々何だったのかも分からない酷い状態で、辛うじて“それ”が人型であった――と思える程度――と認識できるぐらいは原型を留めているのがせめてもの救いであった

「……鈴仙、とりあえずこれを調べてみましょう。“外の世界”の物体とは言え何か分かるかもしれないわ。その後で河童達にも知らせて頂戴」

鈴仙と呼ばれた獸耳の少女は「は、はい！」と多少上擦った返事を返すと、“それ”に近づいて行く
所々で黒ずんでいる“それ”に注視しながら調べていく鈴仙は、あ

ることに気付く

「……？これって……」

“それ”は、基本的に水色を基調としたカラーリングだったのか、黒ずんでいる箇所外からも水色が見える。

そして、鈴仙が気付いたのはその“黒ずんだ箇所が水色になっていく”現象である。

しかも、見る限りでは所々で同じ現象が起きていたのである

「——！師匠、これを！」

師匠——と呼ばれた女性は鈴仙が呼ぶ場所まで近付く。

そして鈴仙が指し示す箇所の現象を見、暫く顎に手を当て思考した後、“それ”を見上げながら言う

「これは……“自己修復”かしらね……」

「“自己修復”……？」

「物体の破損した箇所が修復されているでしょう？原理なんて知らないけど、相当な技術力ね……もしかしたら」

師匠と呼ばれる女性は辛うじて人型の“それ”の胴体部分——と思われる箇所——を見つめ、そこに“飛び移る”。

鈴仙もそれを慌てて追い、彼女が師匠と呼ぶ女性の横に並び立つ。

と同時に、その師匠が鈴仙に指示する

「鈴仙、この箇所の付近を手分けして調べるわよ。そして、スイッチの様な物を見つけたら私に知らせて」

「へ？……は、はい！解りました！」

一瞬呆けた声を上げた鈴仙は、直ぐに気を取り直し、指示通り行動する。

十数分手分けして二人は調べたが、中々スイッチと思われる物は見つからず、鈴仙は肩部分の箇所まで調べていた。

その彼女が

「……ん？これって……スイッチ？師匠！」

目的のスイッチを見つけた。

鈴仙に呼ばれた彼女の師匠は、鈴仙の所まで近付き、鈴仙が見つけたスイッチを覗き込む

「これね……コードは……」

そのスイッチは、ある特定のコードを打ち込まないと作動しない仕組みらしく、鈴仙も彼女の師匠も分かるはずがない。

覗き込んでいた彼女は立ち上がり、スイッチの付近を見渡し、溝になっている箇所を発見する。

そこに近付き、彼女は鈴仙に言う

「こじ開けましょう、鈴仙」

「こ……こじ開けるって……どういうことです？」

師匠の言ったことが理解出来なかった鈴仙は、思わず聞き返した。

その鈴仙に彼女は落ち着いた口調で教える

「あくまで私の推測だけど、おそらくこれには人が乗っているわ。」

自律稼働の物体という可能性もあるけど、その正否はここを開けば分かるわ。手伝って頂戴」

「は……はぁ……解りました」

師匠の言うことはまだ解らないことばかりであったが、鈴仙は大人しく従い、師匠が掴む溝とは反対側を掴む。

常識的には、そんなもので、しかも女の身体では触れてみて金属と分かる物を引きはがすことなど不可能で、何かしらの機材が必要である。

しかし、二人はその“常識”とは掛け離れた存在である。

阿吽の呼吸で、いとも簡単にその溝をこじ開けた。

特に苦でもないように息ひとつ乱さない二人は、推測が当たったことを見てとった。

中は球体の様な構造で、人一人は余裕で入れるスペースがある。

そして――

「師匠が言った通り、人が乗ってそうで……？――き、きゃああああああああ！！し、師匠オオオオオオオオオオオ！お、男の人

が……は、裸で……」

「……やっぱり、私の推測が当たってたわね」

全裸で、気絶した青年が乗っていた。

堕ちてきた男

意識はどこまでも深く、自分が何者なのかも曖昧にしていくほど――

深く、深く、沈んでいく

「消えかけた……命……消えかけた……私……」

聞き慣れない、だがどこかで聞き覚えのある声が響く。

まだ、意識は沈んでいる。

それでも、声は続く

「世界を……変える……想いの力……あなたが強く……想う……哀しくて……温かい……力」

ようやく、その声が少女のものであると気付ける具合には、意識も鮮明になる。

しかし、それでも曖昧なものは曖昧である。

やはり、この声は聞き覚えのなくて、だがどこかで聞き慣れた声だった

「私が……私であるために……」

何の事を言っているのかは解らない。

まだ、自分から声を出そうにも力は入らない。
そもそもこの声の主は何を自分に求めている？

その答えは声が教えてくれる

「あなたの想いの力……お借り……致しますの……」

想いの力――

一体何の事かは相変わらず解らない。

しかし、ようやくその声をどこかで聞いたことがあるのかは思い出せた。

そう、その声は――

「……レモ………ン……」

成り行きで出会い、成り行きで築いた関係。

そして、直接言葉を告げず一方的に別れることになった、言外に愛していた女性

その名を、そつと呟いていた

「おれ……は……」

鼻腔を擦るアルコールと医薬品の臭いに、彼は意識を覚醒させた

「う……！」

長らく眠っていたためか、身体の節々が刹那の痛みを与え、それに彼は短く、小さく唸る。

そこで半身を起こし、反射的に状況を確認しようとしたところに、不意に言葉を掛けられた

「あら、眠り王子のお目覚めかしら」

ふくよかな含みで、どこか安心するような女性の声

「……！」

彼はその声の方向に振り向くと、赤と青の色が左右に別れた奇怪な服装の、長い白い髪的女性が好奇心も隠さず彼を見ていた。

その彼は、警戒を含んだ視線をその女性に向ける

女性は大して怯んだ様子も見せず、多少おどけたように言う

「まあ、良かったわ。私は見ず知らずの男とキスする趣味なんてないから」

「貴様は……誰だ？それに、ここはどこだ？」

警戒を一旦解いた彼は、女性の（ある意味過激な）言葉を華麗に無視し、状況を問う。

対する女性は、特に気にすることもなく素直に答えた

「私は八意永琳。ここは『幻想郷』の『迷いの竹林』に在る屋敷……『永遠亭』よ」

「『幻想郷』……だと？聞かん名だな。此処の様式を見る限りでは……極東の『日本』か？」

『幻想郷』『迷いの竹林』『永遠亭』

彼には聞いたことの無い地名ばかりである。

頭に疑問符を浮かべる彼に、八意永琳と名乗った女性は答える

「当たらずも遠からず……と言った所ね。 “機動兵器パイロットの
『外来人』” さん？」

「『外来人』だと？何だ？それは」

再び聞き慣れない単語を聞き、彼は永琳に問う。

永琳は特に慌てることなく、冷静に答えた

「読んで字の如く……この『幻想郷』の外の世界からの幻想入りした人間のことを指す言葉よ」

「外だと……？まさか……！」

外の世界

その言葉を聞き、彼はひとつの予感を感じた。

彼が体験した、似たような現象――

それが本当なら「とんだ因果だ」と頭を抱えなくなるものであった。

そんな彼に構わず、今度は永琳が質問を投げた

「その辺は後でゆっくり話すわ。今は、貴方の事を教えてくれないかしら？ “所属と、官・姓名”を」

「……」

暫く沈黙した彼は、やがて口を開き、答えた

「おれは……『地球連邦軍特別任務実行部隊“シャドウミラー”』
の特殊処理班隊長……アクセル・アルマーだ」

赤く癖のある髪

垂れ目に鋭い意思を宿した紅い瞳

美形と称してよい顔立ちの青年――

アクセル・アルマーは、自分の官・姓名を名乗り矢継ぎ早に質問を返した

「さっき言っていたな。おれが“機動兵器パイロット”だと。何故そう思った？」

「それは貴方、それらしい物に乗っていたら誰だって分かるわよ。そこから貴方を助け出したのだから」

アクセルの乗機は、通常民間人が触れていいものではない

かつてアクセルが“DC”と呼ばれる組織の残党の集落に接触した際、その集落の子供にその乗機を発見された時には口止めを頼んだほどである。

しかし、此処はアクセルのいた“新西暦”の世界ではない。『幻想郷』という、アクセルに馴染みの深い“こちら側”とも“向こう側”とも違う、異質の世界である。

それに、アクセル自身何か事を起こすつもりも無かった

（どの道、ソウルゲインはもう動かんだろう……それに、おれは……）

一瞬沈みかけ、しかし直ぐに気を取り直しアクセルは永琳に問うた

「おれは深傷を負っていたはずだ。この身体……貴様らが治療したのか」

アクセルが意識を失う以前の彼の記憶では、アクセルは宿敵との死闘で乗機共々深い傷を負い、アクセルの身体は瀕死状態であった。

しかし、今のアクセルの身体は、彼の感じる限りでは全く痛みは無く傷も無い。

身体は全て、正常であった。

「大した医療技術だ。あの状態からここまで……」

故に、アクセルは素直に賛辞を永琳に述べる。

しかし、彼女の口から飛び出したのは以外な言葉だった

「治療？何を言っているのかしら？私達がコックピットハッチをこじ開けた時……貴方は無傷だったわ」

無傷――

その言葉を聞いた時、アクセルは呆然となり、直ぐに反論した

「何だと……！？馬鹿な、そんなはずがない！おれの手足は……」

見るも堪えない状態で、アクセル自身死を覚悟していた程であった。

しかし、永琳はそんなアクセルの記憶を否定するように言葉を続ける

「記憶が混乱しているようね。貴方がケガをしていないことは、コックピットを開けた瞬間にわかったわ」

「何……？」

コックピットを開けた瞬間わかった――

細かい検査もせず何故わかったのか……
衝撃の事実が、永琳から告げられた

「素っ裸だったわ。外傷がなかったのは、一目瞭然よ」

「おれが？どいうことだ……！」

「知らないわよ。脱いだのは貴方でしょう。その“シャドウミラー”って組織の儀式かなにかかしら？とんだ変態集団ね」

戦闘状態時であろうが、待機状態時であろうが、自分の乗機で全裸になる必要性も意味も無い、正気の沙汰とは思えない行為である。彼女が言うように、そんなことをするのは変態か何かであろう。

無論、アクセルは変態ではない

(……嘘を吐いている感じではない。おれに何が起こった……？)

何らかの外的要因が加わったのか……

そう思いかけたアクセルは、ふとあることに気付く。

服装である。

彼の白を基調とした少々奇抜な服は、洗濯したてのように清潔だった。戦闘の破片で傷付いたり、彼の血はかなりの量付着していたはずである。

彼女らが見繕った可能性もあるが、アクセルは問うた

「……服は？おれの血ぐらいは付いていたんじゃないのか？」

「見てのとおり、付いていないでしょう？……今、貴方が着ているのがそれよ」

「……………！」

しかし、これも元の自分の物そのものであった。

ますます自分の身に何が起こっていたのか、アクセルは解らなくなつた

「それは貴方の横に畳んで置いてあつてね。洗濯したてのように綺麗だったわ。“シャドウミラー”とは、変態のわりに随分綺麗好きな部隊ね」

何気に自分の元所属していた部隊が罵倒されていたが、アクセルはそれに構う余裕は無かつた

（何者かが、ソウルゲインに？あり得ないが……説明がつかん……）

そんなアクセルの心情を知ってか知らずか、永琳は思い出したかのように言い出した

「あら、そうだったわ。大切なことを言い忘れていたわ」

「何……？教えろ、おれの身体に何が……」

とにかく今は情報が欲しい――

アクセルは矢継ぎ早に永琳に詰め寄る

が――

「……貴方の裸を見たのは私と弟子のひとりだけよ。その子かなり興奮してたけど、別に心配することは無いわよ」

「……そんなことはどうでもいい」

しかし、（アクセルにとって）どうでもいいことであった。

「質問ついでに、もうひとつ教えてもらおう。……何故、おれを助けた？」

「用があつたのはむしろ貴方の機体の方ね。なんて言うのかしら、

あれ」

聞く者によればそれなりにドライな返答をつけたアクセルだが、特に気にせず答える

「ソウルゲインだ……あれを使つて何を？」

無論、彼の乗機——ソウルゲインをどのように彼女らが利用するかによつて、アクセルも態度を改めなければならない。

だが、永琳は先程までの多少ふざけた様な表情から一変、真剣な表情で答える

「……そのソウルゲインのスペックがどれ程の物かは知らないけど、あれだけのサイズの機動兵器なら、動かし方ひとつでこの『幻想郷』のパワーバランスが崩壊しかねないわ……それに、不可解な事も起きたわ」

「不可解……？何がだ」

「“消えた”のよ。貴方をソウルゲインから引つ張り出した後、唐突に、音も無くな」

「な……に？」

永琳の言動からすれば、『幻想郷』にソウルゲインの様な機動兵器は存在せず、動かし方ひとつでパワーバランスが崩れると言いつのなら、技術力は“新西暦”に比べ低いと見えた。

が、次いで告げられた永琳の言葉でそれらの検案事項は、アクセルから無くなった。

ソウルゲインが消えた――

自分の身体についても不可解な事ばかりだったが、しかしこれはそれ以上だった。

（何から何まで、この世界に来てから不可解な事が多過ぎる……『ベーオウルフ』……いや、“キョウスケ・ナンブ”……違う世界でも奴に関われば碌なことにならんと言うことか、こいつは）

内心で自嘲していた所に、突如部屋の襖が開けられ、一人の少女が入室してきた。

腰まで伸びる薄い紫の長髪に、多少趣味的な紺色のブレザーにピンク色のミニスカート

極めつけは、頭頂部から双方向に伸びる兎の耳

その少女はアクセルを一瞥して直ぐに目を逸らし、永琳に近付く

「師匠」

「ええ。……アクセル、貴方には悪いけど暫く監視をつけさせてもらうわ」

「……」

その彼女が？とは聞かず、アクセルはただ無言で肯定の意を表した

「まだ色々聞きたい事もあるけど、貴方も一人で色々考えたいんだろっし……けど、貴方の素性はまだわからないから——」

「監視を付けるのだろう？……暴れるつもりなどない。おれの戦争は……あの時におわったのさ、これがな」

彼女の密かな心遣いに言外で感謝し、アクセルは沈黙する

（……そう、終わるはずだった。助かるはずのない傷を負って。そのおれに……何が起きた？）

一人静かに思考を深めていく。
疑問は尽きなかった

（レモンの声が聞こえたような気がしたが……まさか、な）

あり得ない

そう思考を締めくくるアクセルを待っていたかのように、永琳はあ
ることを告げた

「そうそう、その娘の名前は鈴仙・優曇華院・イナバ。監視に付く
のはその娘で、私の弟子の一人。貴方の裸を一番最初に見たのもそ
の娘よ」

そう言い残し、去っていった。

紛れも無い、爆弾だった。

狡兎死して走狗煮らるか？（前部）

日本式の和室に襖の扉

先程まで在った薬品類は、アクセルが無傷だったため使用されることはなく、鈴仙同様兎の耳を付けた使用人と思われる少女が持つて行ったため、今は無い。

アクセルは畳の上に敷かれた布団に胡座をかいて座り、腕を組んで黙り込み思考し、もう一人——鈴仙は、部屋の隅から黙ってアクセルの背中を見つめていた。

互いに、会話は無い

「……………」

「……………」

一方は考え事

一方は警戒の意を持った沈黙を保ち、室内は自然と重苦しい静けさに支配された

（戦争では最後に立っていた者が全て正しい……そしておれは敗れ、

奴は…… キョウスケ・ナンブは勝利し、おれは倒れ奴は立っていた。そうしておれの闘争は終わった……)

『ベーオウルフ』

アクセルの元居た“新西暦”の世界の“向こう側”の世界で鎬を削った宿敵――

世界のバランスを崩し、進む先に在る物全てを喰らい尽くす“化物”

『地球連邦軍特殊鎮圧部隊』 “ベーオウルブズ”

隊長機である“ゲシュペンストMK-?”のパイロット“キョウスケ・ナンブ”の異名から取られたその部隊に、アクセル達“シャドウミラー”は敗れた。

最終手段として“シャドウミラー”隊長の“ヴィンデル・マウザー”は、奪取した『テスラ・ライヒ研究所』より押収した機動兵器等と共に、前々から着目していた“システムXN”による次元転移を敢行。

部隊の半数を犠牲にし、“極めて近く、限りなく遠い世界”へ転移した

(キョウスケ・ナンブ…… “向こう側”の様な力を持たず、ただ眼前の敵を撃ち貫く事だけに集中していた奴と、“向こう側”と“こちら側”との悔恨を捨てきれなかった、おれとの差……か)

しかし、“シャドウミラー”は転移した先の世界で再び敗れた。

元の世界の“ベーオウルブズ”と同等の戦力を持つ“ヒリュウ・ハガネ隊”によって――

（結果、流れを失いおれはこのザマ、か。フ……人間としての道を外し、“人形”になることを望んだ者の当然の報い……だな、こいつは）

“永遠に闘争の続く世界”

戦争の後に待つのは『平和』という名の“腐敗”でしかない。だから、永遠に闘争が続けばその“腐敗”が訪れることは永遠にない。

戦争を望む者には楽園、そうでない者には地獄でしかない世界

自分達の居た世界とは違う世界で戦力を増強し、“システムXN”の生体コアである“ある男”を捕らえ、システムを完全の物とし、元の世界へ帰還・制圧した後、安定した次元転移で様々な平行世界を行き来できる軍隊――

（そう……おれは人の道を外し、W17……ラミア・ラプレスは人としての道を歩み、新たな生き方を見つけた……）

その軍隊を造り出すため、アクセルは戦い続けた。

そうして、“向こう側”と違い“力”を持っていない“こちら側”の“キョウスケ・ナンブ”が“向こう側”の様な力を持つことを恐れ、憂いを絶つために彼を執拗に狙い、一度は彼の搭乗機——“こちら側”の“ゲシュペンストMK-?”である“アルトアイゼン”——を追い詰めた。

しかし——

（おれ達のような存在が来る世界ではなかった……奴の言う通り、おれ達は敗れた……そんなおれがこの世界に受け入れられるはずは……ない）

あと一撃で屠れるところを、『アインスト』達に邪魔されアクセルは流れを失い、最終的にアクセルは『ホワイトスター』で、強化された“アルトアイゼン”——“アルトアイゼン・リーゼ”に搭乗する“キョウスケ・ナンブ”やその仲間達に敗れた。

W17——ラミア・ラブレスに脱出を促されても、アクセルは脱出しようとしなかった。

戦争の敗者には死あるのみ

次元転移と、それまでの戦いでアクセルは多くの部下と仲間達を失ってきた。

彼らに報いる為にも、アクセルはただ一人生き残るつもりはなかった。

しかし、アクセルは現にこうして生きている。

“こちら側”とも、“向こう側”とも違う『幻想郷』という世界に

(平和による腐敗……戦争による破壊……どちらにせよ、失われるものは数多く存在する)

アクセルは永遠に闘争の続く世界の先に在るものを知っていた。

知っていながら、止めようとはしなかった。

ただ自分の信念のため、己の信じるもののために戦い、そうして『ベーオウルフ』のようにただ世界を破壊し尽くす存在になるのも辞さないつもりだった。

しかし、アクセルは敗れ“シャドウミラー”も恐らく——あの宙域の静けさを考えれば、壊滅したのだろう。

無二の戦友ヴィンデルと、恋人のレモンも――

(……レモン、ならば……おれはどうしたらいい……？わけもわからず生き残ったおれは……)

かつて破壊者として世界に混沌を齎す片棒を担いでいた自分はこの世界に存在していいのか？

アクセルはもう世界を乱すような真似はしなくなかった。

ならば自決すべきか？

そう思い込んだその時

「!」

頭に、言葉が響いた

(……感じ……ますの……。かつての……同胞を……)

「何だ……!？」

聞き慣れない、しかしどこか聞き覚えのある、少女の声がアクセルの頭に響いた。

部屋の片隅にいた鈴仙は、アクセルの様子が突然おかしくなったことで、警戒の眼差しを強める。

しかし、アクセルはそれに気付かず、少女の声も構うことなくアクセルの頭に響く

（……でも……彼は……歪められて……しまっておりま……もう……私の言葉も……届かない……）

「この声……まさか……まさか、あの時の……!？」

ゆったりとしたペースで聞こえる声に、ようやくアクセルは声の正体に見当が付いた。

大破したソウルゲインの中で、意識が途絶える直前と、意識が戻る直前に聞いた声。

そのアクセルを見ていた鈴仙は、アクセルが一人で呟き出したことに疑問を抱き、アクセルに近付こうとした時だった

「鈴仙、ちょっと来てくれるかな！」

「てゐ!?!どうしたの？」

突如襖を開け、鈴仙を呼び出した兎の耳を頭から生やした少女——てゐは、鈴仙の腕を引っ付かむと「お師匠様が呼んでる!」と口早

に叫び、それに引つ張られる形の鈴仙は、アクセルに「指示があるまで動かないで!」と釘を刺しておき、大慌てで退室していった。てゐの乱入で我に返っていたアクセルは、二人(?)の様子から何事が起こったのを察した

「……慌ただしいな……何事だ?」

元戦闘隊長の感覚から、冷静に状況を判断しようとした時――

突如、振動がアクセルを襲った

「爆発?何が起きた!?!」

内側からの振動なら、『永遠亭』の実験か何かとは判別出来る。

しかし――

(振動が来た方向から考えれば、襲撃……か?だが、一体何の……?)

振動が来たのは、外側

つまりは、何かが襲撃してきたということだった

（どうも嫌な予感がする……状況を確認しなければならんか）

何かは解らない。

しかし、こういう時にはどうも嫌な事が起きる――

自分の直感に従い、アクセルは叫んだ

「誰かいなかったのかッ！何が起こった！」

鈴仙はまだ戻ってこないが、下っ端の少女くらいならいるだろう――

そう思い叫んだアクセルは、不意に――

「うつ……？何だ、この感じは……」

奇怪な感覚に囚われ、完全に起こしていた身体をつずくまらせ、片膝を着く姿勢になった。

そして再び、頭に声が響いた

（『あれ』は……危険な……存在……。いえ、危険な存在に……な
りますの……）

（また頭の中に……直接声が！？）

しかし、アクセルは冷静に思い直した

（……おれがおかしくなっていないならば……この声は……！）

アクセルは狂人でもなければ変態でもない、元戦闘隊長という点を
除けば至ってノーマルな人間である。

アクセルは問いただした

「……おい、おれの声はそちらには聞こえているのか？」

（……………）

声は少々戸惑う様子を見せながらも、素直に応えた

（……聞こえておりますの、これが）

「貴様は何者だ？何故、おれに語りかける？」

(……………)

再び声は沈黙したが、やや間を置いて答えた

(……………あの蒼き巨人に……………あの蒼き巨人で……………追っていたきたい
ですの)

「ソウルゲインのことか？追えとは、何をだ？もっとはつきりと言え。それに、ソウルゲインは……………」

諸々の事情を聞き出そうとしたところに、間が良いのか悪いのか、足音が幾つか近付いて来るのをアクセルは感じた

「ちっ……………誰か来たか」

アクセルは舌打ちしながら、部屋に入室した者の名前を呟いた

「八意永琳……………」

「緊急事態だわ、アクセル」

緊急事態と言うわりには落ち着いた様子だった。その証拠に――

「何か声が聞こえていたけど、新手の一人遊びかしら？相変わらずアナーキーね」

アクセルをからかう余裕があった。

アクセルはまともに取り合わず、適当にあしらった

「……説明するのも面倒だ。それで構わん」

「ふふ、まあいいわ。そんな遊びよりも、やってもらいたいことがあってね」

永琳も特に気にせず、アクセルを仕草で退室するよう促し、部屋のすぐそこに在る中庭に視線を移した。

それに釣られて目を移したアクセルは驚嘆した。

そこに在ったのは――

「な！？これは……！」

「さっきいきなり現れてね……詳しい形状は知らないけど、貴方の
なんでしょう？」

全長40mはあろう巨体

全体的に水色で、上半身の各所に緑色のクリスタルの様な装飾

そして、頭部の口髭の様に双方向に伸びるブレード

かつて『テスラ・ライヒ研究所』から奪取し、以後アクセルの専用
機となった“特機”

「ソウルゲイン……！」

戦友の名を、アクセルは呟いた。

狡兎死して走狗煮らるか？（前部）（後書き）

八房先生漢字むずいっス

狡兎死して走狗煮らるか？（中部）

7分前

アクセルの監視を鈴仙に任せた永琳は、医務室兼書斎の部屋に籠ると、机に置かれたカルテ数枚に目を通した。

誰のカルテかと言えば、当然アクセルの物である。

アクセルに後遺症らしきものも無く、至って健康であるためそのままで気にする必要もあまりない。

しかし、永琳はそのカルテを何度も見直し、彼女にしては珍しく大きな溜め息を付いた

「……彼は全く自覚してないのか、そう装っているかは解らないけど……あの機動兵器も含めて、謎ばかりね……彼」

人間の身体は基本、水分が7割とその他3割の部室で構成されている。

地球を構成している割合——水7：陸3——と同じ数値で、「人間は地球の一部」とも言われている。

しかし、アクセルは違った

（人体を構成している成分の約8割が水分ともタンパク質とも違う、異質な物質……月の民達にも“蓬莱人”にも、こんな物質は含まれ

ない……どちらかと言えば……)

“妖怪”

『幻想郷』という世界は、人間達の考えるような甘美な“幻想”とは程遠い、美しく過酷な世界である。

この幻想郷は、世界と時に忘れ去られた幻想達の拠り処——人間達がかつて畏れた“妖”が集まり、それらの賢者達が形成した結界によつて隔離された“楽園”

その“楽園”に住まう者の大半は“妖怪”で構成されている。

その“妖怪”達の糧は、人間

人間達の中の食物連鎖の頂上は自分達人間だが、『幻想郷』での頂上は“妖怪”達である。

無論、そんな世界故人間が居なければこの世界は成り立たない。

『幻想郷』にも『人里』と呼ばれる人間の集落は存在する。

しかし、小規模故“妖怪”が一気に襲い掛かれれば『幻想郷』の人間はほぼ消えることになる。

それでは本末転倒であるため、“ある妖怪の賢者”が“外側”から人間達を糧として『幻想郷』に放逐することでバランスを保っている。

それを“外来人”と呼び、アクセルもその一人である。

しかし、アクセルは普通の“外来人”とは——ソウルゲインを含めて——掛け離れた異質な人間だった

（外の世界にあんな機動兵器が在るなんて聞いたことが無いし、私が生きて来た中で見たことも無い……やはり）

永琳は、最初に大破したソウルゲインを見た時から薄々予感を感じ

アクセルと会話を交わした際に聞いた“地球連邦軍”という単語

この『幻想郷』にも多少外の世界の情報は入ってくることもあるが、“地球連邦軍”という組織は聞いたことが無かった。

それらを統合し、永琳はひとつの答えを出した

「彼はこの世界の人間でも、外の世界の人間でも無い……」

改めて思えば、奇妙な話である。

かの“妖怪の賢者”なら——

否、あの“妖怪の賢者”以外に事態の推移を知る者はいない。

しかし、その“妖怪の賢者”の行方を掴むのは並大抵のことではない。

再び溜め息を付いた永琳の耳に

「今日は随分と溜め息が多いんじゃない？」

優雅さを感じさせる、女性の声が響いた

「……珍しく今日は部屋から出たのね」

「失礼ね！人をニートみたいに言わないでくれる？」

しかし、永琳の一言で優雅さを一気に失わせた声の主は、小さく咳ばらいしつつ座り込んだ。

平安時代を彷彿とさせる色鮮やかな着物を着こなした、美しい黒い長髪の女性は落ち着いた様子で口を開く

「迷いの竹林から拾ってきたあの色男……鈴仙が『露出狂の変態』
って言ってた彼の素性……貴女の溜め息の原因はそれかしら？」

「お見通しつてわけね……“地球連邦軍特別任務実行部隊シャドウ
ミラー隊特殊処理班隊長”……それが彼の所属部隊だそうよ」

「地球連邦軍特……まあ、“シャドウミラー隊”ね……」

永琳は再びカルテを手に取り、対面の女性に手渡した。

受け取った女性はそのカルテを見、片眉を上げ一通り目を通すと永琳にカルテを返し一言

「なるほど、解らん」

「……それは彼の8割を占める謎の物質が、それともカルテそのものかしら？」

「前者よ！なにちよつと人を馬鹿みたいに言ってるのよ！」

呆れたように言う永琳に再び声を荒げた女性は、また落ち着き払うように咳ばらいし、言う

「不思議な物質ね。カルテを見る限り、彼が目覚める3日の間に謎の胎動を繰り返す……そんな物質、聞いたことないわよ」

「私もよ……妖怪じゃないんでしょうけど……」

二人して「ううむ……」と考えだした、その時――

「――なっ!？」

「な、何事よ!!？」

突如、衝撃が二人を襲った。

衝撃の方向は、外側から

しかも、『永遠亭』からそう遠くない距離で

「妖怪の襲撃? いや――」

「弾幕の威力じゃないわよ!？まさか、あの娘――」

「それこそないわ。結構深刻な状況のようね」

慌てる女性を尻目に永琳は冷静に状況を分析すると、一人の少女の名を呼んだ

「てゐ！居るかしら？」

「お師匠様！！大変ですよ！！」

呼ばれて直ぐに飛んで来た、短い黒髪に頭頂部から双方向に伸びる
兎の耳の少女

その少女に永琳は素早く指示を飛ばす

「直ぐに鈴仙を呼んで頂戴。アクセルへの監視は今はいいわ」

指示を受けたてゐは直ぐに踵を返し、アクセルを監視している鈴仙
の下へと行く。

それを見届けた永琳は、幾分か落ち着いた女性へと言葉を掛けた

「貴女も、地下に戻った方がいいかも知れないわ」

「冗談！どの道私達は“死なない”んだし、そもそもこんなことで
びびってるようじゃ、威厳もあつたもんじゃないわ！」

避難している——という旨の永琳の言葉を跳ね返し、女性は立ち上

がる。

その強気な様子に永琳は苦笑しながら、襖を開け中庭を見渡せる縁側に出た。

根本的に、状況を目で見ようと永琳は思ったからである。

そして、“それ”を見て固まった。

釣られるように永琳と同様に縁側に出ようとした女性は、固まっている永琳を怪訝に思い永琳に近付き――

そして、固まった

「な……な……」

「……まさか」

そびえ立つ“それ”

正確には、片膝を着いた水色と白を中心とした頭部に髭の様なブレードが双方向に伸びた

巨人

「何よ、これえ……」

「まさかこれが……」

女性、永琳と続いて呆けた声を上げた二人の下に

「し、ししょおおお！！何ですかあれええええ！！」

「少し落ち着きなさいよ、鈴仙……」

慌てふためく鈴仙と、その鈴仙に呆れたように宥めるてゐが近付いて来る。

その声で正氣に戻った永琳は、鈴仙達に向き直り

「鈴仙、アクセルはまだ部屋に居るのね？」

「ふえ？は、はい。居るはずですよ」

その答えを聞いた永琳は、本来の目的である先程の衝撃の正体を確認すべく、中庭より向こうの竹林方向を仰ぎ見た。

釣られるように永琳と同じ方向を見た他三人は

絶句した。

その先に見たのは、魑魅魍魎

その言葉の様な、異形の集団だった。

触手の様な物が伸びる異形や、骨のみで構成された異形

全て灰色で統一された集団——しかも、全て人間を遥かに凌駕した
大きさで、ただの人間ならそのまま踏み殺される。

しかも悪い事に、それら異形は『人里』の方向を目指しているよう
だった。

永琳は視線を鈴仙達に戻す

「鈴仙、アクセルの容態はもう問題無いわね？」

「へ？もう問題無いみたいですけど……まさか」

呆けていた鈴仙に永琳は問い、そして鈴仙は永琳の考えることを察
した

「そう、そのまさかよ。彼に……“シャドウミラー隊特殊処理班隊長”アクセル・アルマーに、この状況を」

「何とかしてもらっ……ですか？」

鈴仙の問いに、永琳は満足げに頷いた。

狡兎死して走狗煮らるか？（中部）（後書き）

第二次スパロボZやってたらこんな遅くなった

狡兎死して走狗煮らるか？（後部）

12分前

『迷いの竹林』と呼称される、鬱蒼として、深い竹林にその一団は居た。

此処から数？離れた所に位置する人間の里——『人里』から召集された十数人程の若い男達と、白髪の少女が一人という集団

『自警団』

本来、『迷いの竹林』に迷った人間等を『人里』か『永遠亭』に案内するのが目的である『自警団』

その構成は、白髪の少女一人だけで、ここまで大所帯ではない。

各々手に長く硬い棒を持ち周囲を搜索している男達を見、少女——藤原妹紅は溜め息をついた

（慧音も心配症だな……たかが物を探す為だけにこれだけの人数を遣すなんて）

『自警団』というものは、本来『迷いの竹林』で迷い込んだ人間を『人里』か『永遠亭』に案内するのが本業で、竹林で暮らす妹紅一人が行っている。

『自警団』という名称も、『人里』の人間達に分かるよう付けられたものだった。

今、彼女以外に若い男達を引き連れ竹林を探っているのは、数日前に突如現れ、そして突如消えた“謎の物体”の搜索だった。

妹紅自身は直接目にする事はなかったが、『永遠亭』の“実質的な”当主の八意永琳とその弟子の目撃・接触と、その物体の“中の人”を収容した経緯、そして——妹紅にとって重要な——『人里』に生きる“歴史喰いの半獣”上白沢慧音の依頼で、その物体を搜索しているのであった

（その慧音も2〜3日前の“異変”の調査に行ったし……変な事が続くな、最近）

その上白沢慧音が妹紅に搜索を依頼したのは、彼女も別の“異変”の調査に行かなければならなかったためである。

2〜3日前、『人里』——延いては『幻想郷』全体が紅く深い霧に包まれ、地上に日の光が届かず気温が上がらない。
人間はこの霧を吸うだけで気分が悪くなり、『人里』どころか家からもまともに出られない状態が1日半程続いた……

そんな“異変”である。

そんな事があつた後に、『迷いの竹林』に現れた“謎の物体”

何かしらの因果さえも感じさせる二つの事象

紅い霧の調査には、上白沢慧音の他にも『人里』以外の場所から何人かが出向く。

“謎の物体”の調査には、物体の“中の人”から事情を聞き出すのは『永遠亭』の関係者。

物体そのものの搜索は藤原妹紅が行うこととなった。

妹紅自身は、物体の搜索は彼女一人で行うつもりだった。

しかし、彼女の理解者でもある慧音は「一人で探すのでは、時間が掛かるだろう。里の者も何人か搜索に協力させよう」と言い出し、妹紅も「まあ……確かに一人よりも多人数の方が探しやすいけど……」と了承した。

そこで妹紅に予想外だったのは、数人だと思っていた『人里』の人間の数が、十数人と多かったこと。

搜索だけなら人数は多い方がいい。

しかし、不確定な要素——妖怪等——があれば、妹紅にとっては足手まといでしかない。

人間と変わらない姿ではあっても、妹紅は人間とは決定的に違う。

“蓬萊の薬”

飲めばその者に不死を与えるその薬を、ある事情で飲み、不老不死の軀を得た人間の少女。そして、長い間生きてきて習得した妖術で、並の妖怪などものともしない力の持ち主である。

故に、彼女自身が妖怪に襲われても彼女はそれを退けることは苦ではない。

しかし、人間は違う。妖怪に遥かに力の劣る人間では、妖怪には太刀打ち出来ず、逃げるくらいしか選択肢がない。

この時のように、分散している状態では、いくら妹紅でも全員を守りきることは出来ない（襲撃してくる妖怪が単体とは限らないため）。

（今日は何も妖怪が現れないことを祈るけど……さすがに、目の前で人が死ぬのは後味悪いしな）

心の中でそう祈ったときだった

「妹紅隊長!!」

「うおう!?!何だ?見つかったのか?」

召集された一人の男が、妹紅の名を呼び、妹紅は頓狂な声を上げながら、応えた
妖怪の襲撃かとも思ったが、その男の表情から読み取るに違うらしく、妹紅は目的の物が見つかったと一瞬思った。

しかし――

「いえ、その……」

「なんだよ？報告に来たんならはつきり言えよ」

妙に歯切れが悪く、妹紅はその男に詰め寄り問い掛けた

「その……人間らしき少女が……」

「人間らしい？妖怪じゃなくてか？」

「妖怪にしては我々に襲い掛かる様子がなかったの……他の者達もそこに集結してます」

「……案内しな」

つまりは、そういうことらしかった。

軽く頭を抱えながら、妹紅はその男に案内を促し、その謎の人物の下へと向かう。

案内されてきた地点には、他の男達が集結しており、皆表情に困惑を浮かべていた。

妹紅が来たと分かると、男達は少し戸惑うと、その中の一人が妹紅に近付き、耳打ちをする

「妹紅隊長、彼女が竹林に居た人間なのですが……」

「妖怪じゃないんだろ？迷ってんなら一旦そいつを『人里』に案内するよ。全員で」

「いえ、その……迷っているわけではないようです」

「?どういうことだ?」

片眉を上げ、妹紅は問う

「……我々が問い掛けても、意味不明なことばかり言うてくるので

……」

「……私が問い掛けてみる」

頭をかきながら妹紅は男達に「私の後ろに下がんな」と指示を飛ばし、そして、件の人物を初めて見る。

全体的に黒い服と帽子を着けた小柄な身体
少女と解るその人物に、妹紅は問い掛けた

「お嬢ちゃん、迷子かい？迷子なら『人里』まで案内するし、そうじゃないならこんなところで何してたんだ？」

「……………」

妹紅の質問に沈黙で返した少女に、妹紅がさらに問い掛けようとしたとき、少女は口を開く

「……もうひとつの世界……もうひとつのルーツ……全ては、静寂なる世界のために……」

「……………は？」

しかし、言うことが意味不明だった。

呆けた顔をする妹紅を笑うように、彼女は可笑しげな声を上げる

「はは！私、ユキ。こう見えて魔法使い。だから妖怪じゃないわ」

「……で、その魔法使いが此処で何してんだ？」

軽くウンザリしてきた妹紅は、もう一度少女——ユキに尋ねた。

妹紅達も暇ではない。

案内するなら手早く案内する

目的があつて居るのならその目的を聞き出す必要もある。
特に、ここ数日の現象を鑑みて、である

「ねえ、私達はもうひとつの世界から来たって言ったら、信じる？」

「……………？」

「もうひとつの世界……私達は創造するの。静寂なる世界……創造。
それを乱すものを破壊……創造は破壊、破壊は創造……ふふ……創
造の破壊、破壊の創造、創造を破壊、破壊を創造、創造、破壊、破

壊、創造……」

妹紅の問い掛けに、一時はまともな反応を示したユキは、再び意味不明な単語を唱え始める。

確かに、男達の言うように意味不明で困惑するのも解る……と妹紅は嘆息する。

周りの男達も皆困惑していた。

と――

「ふふ……私達の世界に、貴女は存在していなかった……」

不意に、ユキが妹紅に話し掛けてきた。

妹紅はいい加減苛立ってきており、声を荒げる

「お前、いい加減に――」

「不要な因子……修正」

ユキが小さく呟いた次の瞬間――

「――!?」

竹林の――正確にはユキの背後の『空間』が“開き”

「な……あ……」

その巨大な『空間』から、“それら”は現れた。

裕に、20mはある巨体

灰色をベースとした色合い

骨や触手、鎧等が構成する体

しかも、一つや二つではなく、その数は10体程は居る。

その内の一つにユキは飛び移り、妹紅達を冷厳に見下ろす。

そこで漸く事態を飲み込んだ妹紅は、未だに呆ける男達に怒鳴る

「お前ら、さっさと逃げろ!! 逃げ、私に構うな!!」

その怒声で漸く我に帰った男達は、大慌てで『人里』を目掛け走り出す。

状況は混沌としていた。

妹紅は、自分達を見下ろすユキに睨み返し、そして“背中から炎の翼を噴出させ飛び上がる”

そしてユキよりも高い位置まで飛び、そして――

「先ずはお前からだ……！！『フジヤマヴォルケイノ』！！」

自身の、最大の威力を持つ妖術

『フジヤマヴォルケイノ』

莫大な熱量を持つ炎を、ユキに目掛け放つ。

周囲に衝撃を伴って放たれた炎は、ユキに直撃する

しかし――

「……な！？」

「ふふ……“まだ”足りないね……」

遠慮容赦一切無用の炎を受け、確かにユキが致命傷を負ったのを妹紅は目撃した。

しかし、それを上回る速度で、“再生”していたのである

「全ては、あの方の……静寂なる世界のために……」

何事もなかったかのように薄く微笑むユキのその目は、紅く妖しく光っていた。

揺れる心の錬金術師（前書き）

待たせたな！

えっ？待ってない（´・ω・`）

揺れる心の錬金術師

『永遠亭』の中庭に頓挫する全長40mはあろう蒼い巨人ーソウルゲインのコックピットの中に、アクセルはいた。

ソウルゲインが膝を着いていたためおおよそ半分の高さであったのと、アクセル自身人間離れた体術の持ち主であったため、コックピットに入るのは容易であった。

コックピットに入り込んだアクセルは、先ずソウルゲインのエネルギーチェック、及び二つのメインシステムの状態を確認する。

ソウルゲインは、アクセルの元居た”新西暦”の世界の機動兵器ーI『PT』、AM』とは一線を画した『特機』と呼ばれるカテゴリーの機体で、機体のメインジェネレーターやOSも根本的に別の規格で開発されている。

ソウルゲインはその中でも特異な機体で、他の特機には無いノウハウを積んでいる

「エネルギーはフルチャージか。ダイレクト・フィードバック・システム、ダイレクト・アクション・リンク・システム共に異常なし」

ダイレクト・フィードバック・システム（以下DFS）とは、パイロットの思考を機体に直接リンクさせるシステムで、これにより、非常に高い追従性を誇る。通常、『PT』のみならず『特機』級の機体にも『TC・OS』と呼ばれるOSが搭載されるが、ソウルゲインには一切積まれていない。

それは、ダイレクト・アクション・リンク・システム（以下DAL

S)の存在が大きく関わる。

このシステムは、コックピット内のパイロットの動きに合わせて機体が駆動するもので、ソウルゲインのコックピットもこのシステムに併せて特殊な仕様になっており、通常コックピットにはシートと操縦桿等が存在するが、ソウルゲインはそれらを一切排し、パイロットがコックピット内で自由に動ける構造になっている。この二つのシステムの併用と、アクセルの人並み外れた体術（当然ながら、パイロットが武術の達人でもない）と機体追従性が下がる欠点もこの機体にある）によって、ソウルゲインは極めて高い機体追従性を誇る機体となっている。

ソウルゲインの状態は、完璧だった

「機体の調子はどうかしら？」

地上からソウルゲインを見上げる八意永琳一行（アクセルの見慣れない女性も1名居る）の中から、永琳が声を上げたのをソウルゲインの通信機が拾い上げ、コックピット内のアクセルに告げる。アクセルはそれに淡々と応えた

「…完璧だ、八意永琳。多少不自然なくらいにな」

ソウルゲインの外部スピーカーを通してアクセルの声が響く。それに地上の少女たちは驚くが、永琳だけは物怖じず、4分のおどけと6分の疑問で答える

「あら？なんのことがしら？」

アクセルもその返答が解っていたのか、特にそれ以上追及するでもなく、ソウルゲインの全周天モニターの左側にコンピューターグラフィックスで映像化された“それら”に注意を向ける。

骨・触手等で身体を構成し、胴体中央部に赤い球体を持つ“それら”をアクセルは知っている。

否、それに似たものを知っていた

（あれは“ボーン”と“グラス”…だが、“アインスト”ではない…あの女の声が追えと言っていたのは奴らのことか…？それに――）

“アインスト”

嘗てアクセルのいた“新西暦”の世界で混乱と破壊を齎した化け物。アクセル達“シャドウミラー”も、何度か煮え湯を飲まされたこともあった。

今見えているその異形達は、アクセルの知っている“アインスト”に酷似していた。

正義の味方を気取るつもりは毛頭なかったが、仮にあれが“アインスト”と同じ存在だとしたら、あの無秩序な破壊行為を許容するつもりもなかった。

加えて

（奴らと戦っている…人間…か？どちらにせよ、放っておくわけにもいかん、な。…フッ、おれも、甘くなつたな）

モニターには、炎の翼で空を飛び、腕から炎の渦を放出して一人異形に立ち向かう人間——らしきもの——が映し出されていた。

普通ならば、人間がそのようなことをするのはありえないのだが、状況が状況なためにアクセルに驚いている時間は無い。その辺の頭の切り替えの速さも、さすがは戦闘隊長と言ったところであつた。

加えて、アクセルには疑問があつた

「最後の問題だ。さっきおれに話しかけてきた女……どこにいる？」

「女？女も何も、此処にいるのは基本女だけよ？」

お前は何を言っているんだとばかりに、永琳は疑問の声を上げた。監視に就けさせていた鈴仙のことかと永琳は考えたが、その永琳の思考を遮るかのようにアクセルの声が響いた

「永琳、今のは貴様に言つたわけではない。……こつちの話さ」

もともと、答えを期待していたわけではなかつた。

それに、いい加減あの“アインスト”もどきに立ち向かう者の救援に行かなければいけなかった。

人間の倍以上、しかもあの数相手に一人で立ち向かうのは無謀以上に暴挙だった。

現に、もう押され始めている

（あの声は気のせいではなかった…だが、今あの“アインスト”もどき共を捨て置くわけにはいかん、な）

そう自分に言い聞かせ、ソウルゲインを立たせようとしたときだった――

（彼らは“イエツツト”…歪められた存在です。そして、わたしは――）

突然声が響き、アクセルの身体が眩く輝き始める

「な、なんだ……！？貴様、どこに……ッ！？」

珍しく狼狽した声を上げ、アクセルは自分の身体から“何か”が離れ、欠落するような感覚に襲われた。そうして光がアクセルの身体から抜け、その感覚が収まると、今度はコックピットが『敵機捕捉』のアラームをけたたましく響かせる。

コンソールが示す識別コードは“レッド・オーガ”

ソウルゲインのほぼ真横に突如出現した“それ”——赤を基調としたカラーリングに、触手や骨の様な意匠の四肢。籠手、膝、肩、そして両肩から浮く赤い鬼の面の様なもの。胴体部分に持つ赤い球体。そして、通信に割り込みモニターに映し出される、澄んだ空のように青く美しい髪に目元に赤いタトゥーのような水玉模様のペイントの少女が、アクセルがこれまで何度も聞いてきた声そのもので言う

「呼ばれて飛び出て、大サービス…でございますの」

聞いてきた声の内容より、大分はっちゃけていた

「……なるほど、近いはずだ。スパイ向きの能力だな、こいつは」

「……直接ご挨拶するのは、初めてですの。私はアルフィミィ……以後、お見知りおきをお願い致しますの」

アクセルは直接戦闘をしたことは無いが、名前と外見は部隊のデータから知っていた。

“レッド・オーガ”

文字通り、『赤鬼』意を指すこの機体は、『ヒリュウ・ハガネ隊』に立ちはだかった“アインスト”郡の指揮官機にあたる機体で、“シャドウミラー”のデータベースにはご丁寧に『接触対象AAAクラス“バーオウルフ”との関連性の疑いあり』というデータまであった。

故にアクセルは、前々からの疑問を少女——アルフィミイに聞いたのだした

「あの時……ゲシュペンストMK-?へのトドメを邪魔したのは……貴様だな？」

あの時——

それは、地球連邦軍の、北米を占拠する異星人“インスペクター”への反抗作戦『オペレーション・プラントジネット』の終盤戦のことである。

“インスペクター”と結託した“シャドウミラー”の“システムXN”の時空転移による奇襲作戦によって、敵旗艦である“ハガネ”中破と、“インスペクター”側の広域範囲兵器による連邦軍側の混乱に乗じて、敵指揮官“キョウスケ・ナンブ”の駆る“アルトアイゼン”を大破させ、抵抗力を完全に奪った状態で確実にトドメを刺す、あと一撃のところであった。

そこを、“アルトアイゼン”を模した“アインスト”郡に妨害されたのである。

その後、“アインスト”は戦場となった『ラングレー基地』を包囲。戦場は一気に混沌と化し、“インスペクター”は基地を破棄。“シヤドウミラー”も撤退を余儀なくされたのである。

結果、アクセルはキョウスケに敗れることとなる

「はい……。キョウスケを……。失うわけには参りませんでしたので」

「貴様のその都合でおれは流れ失った。結果がこのザマだ」

そうして、アクセルは生きている。『幻想郷』という、異なる世界に

「はい、私も……。消えなければなりませんでしたの……」

「消える？なら、“アインスト”は……」

「……消滅いたしましたの。キョウスケ達の手によって」

しかし、本来ならアクセルは確実な致命傷を負っていた。

あのままなら、アクセルは間違いなく死亡していたはずであった

「……そうか、“アインスト”も、敗れ去ったのなら……当然か。だが、貴様は……」

「それは、貴方のおかげですよ？」

「……どうということだ？」

そして、“アインスト”が消滅したのならば、同じ“アインスト”である彼女も運命は同じであるはずだった。だが――

「私が消えかけていた時……貴方の命もまた……消えかけておりましたの……」

「そうだ。……あれは間違いなく致命傷だった」

消えかけた命と、消えかけた存在

「私は、貴方の“想い”が持つ力と……蒼き巨人の一部をお借りいたしましたの。そのおかげで、この“ペルゼイン”を再び構成することが出来ましたのよ？」

「おれの身体は……その時に？」

「はい。“ペルゼイン”さえあれば、造作もないことですよ」

その二つが偶然出会うことで、今の二人がある

「かつて、エクセレンも、そうやってお助けしましたのよ？」

「……！？……エクセ……レン……！？それはヒリユウ改の……エクセレン・ブラウニングのことか？」

「はい。……ご存知でございますの？」

「……」

そして、意外な名前——正確には、ブラウニング性にアクセルは驚嘆し押し黙った。

エクセレン・ブラウニングのことは知っていた。そして、もう一人の彼女のことも。

聞き覚えのなくて、しかしどこか聞き慣れた声の主——アルフィミィ

察したアクセルは、しかしそのことを問わず話を続けた

「“アインスト”である貴様が、何故そんなことをする必要があった？」

「私は……もう“アインスト”とは異なった存在になってしまいました。人の“想い”の力に触れたことによって……それはキヨウスケやエクセレン……そして貴方のせい……いいえ、おかげですのアクセル」

「……」

「そして『彼』もまた……人の手によって変えられた存在……。自分は何者かわからない存在……」

そして――

アルフィミイは、静かに言葉を紡いだ

「利用されている存在……この世界を破界し得る者の手によって。故に、彼を……大本となるレジセイアを止めなければなりません」

「世界を破界だと……？」

「レジセイアを……彼を利用する方を止めるためにも、私と、貴方はこの世界へと誘われましたの」

そして、その名を言う

「……『幻想郷』……そして妖怪の賢者——八雲紫によって」

揺れる心の錬金術師（後書き）

遂にOG最新作とは……胸が、熱くなるな……

異形の呼び声

並み居る異形——“イエツツト”相手に、藤原妹紅は必死に応戦していた。

彼女の放つ炎は非常に強力で、20mの巨軀にも、確かにダメージを与えていた。

しかし、相手の再生速度はその炎のダメージを一瞬で修復させるほど速い

次第に、その数に呑み込まれていく。

ジリ貧であつた

（やばいわね……見たところ、あれが頭なんだろうけど……何か切っ掛けがなければ、やられる……！）

彼女の身は不死で、頭部を破壊されようが心臓を貫かれようが、髪の毛一本細胞の一欠けらもあればそこから復活できる。

しかし、それは“彼女の身ひとつ”の話で、今の状況を鑑みればあまり意味は成さない。

妹紅の後ろには、『人里』が在る

妹紅が異形を食い止め、殲滅できなければ異形はその毒牙を『人里』の人間達へと向ける——と、妹紅は考えていた——

彼女は彼女の盟友上白沢慧音同様に『人里』を大切に思っている。
無論、そこに住む者達も。

しかし

「——ッ!？」

転機は唐突に訪れた。

今まで妹紅を狙っていた異形達が、一斉に別の方角を向いたのである。

その方向は、妹紅もよく知る屋敷——『永遠亭』
そして

「な……?何あれ……」

巨神がふたつ、悠然と立っていた。

*

「こちらに気付いたか」

「恐らく、私がこの場に現れたためだと思いますの」

地上で未だに呆然としている永琳達に構わず、アクセルとアルフィミイは、既に戦闘態勢に入っていた。

“イエッツト” 郡は、静かにこちらへの攻撃態勢をとって機を窺っているように見えた。

アクセルは、瞬時に行動を取った

「——ッ！」

自らの足が動くと同時に、ソウルゲインの足が同じように動き、地を蹴る。

動き出そうとしていた骨型の“イエッツト”の懷に一瞬で入り込み、その豪腕を敵の胸元の赤い球体に叩き込んだ。

たったそれだけの、ソウルゲインのエネルギーを直接変換した攻撃を使う事もなく、骨型の“イエッツト”は崩壊した。

付近に居た触手型の“イエッツト”は、ソウルゲインに向けビームによる攻撃を行おうとして——

その胴体を横に真つ二つに両断された。

アルフィミイのペルゼイン・リヒカイトである。その手に日本刀に似た武器——“鬼蓮華”を携え、立っていた。

妹紅があれだけ手を焼いた“イエツツト”を、まさしく「瞬殺」した二体の巨神を呆然と眺めていた妹紅に、アクセルはソウルゲインの顔を眼下の妹紅に向け

「その女、動けるのならさっさと後退しろ。奴らの相手はおれ達が請け負う」

後退——即ち、逃げることを促した。

言われた妹紅は、思わず反論しようとして——やめた。
あれだけ自分が攻撃しても倒せなかった“イエツツト”をあっさり倒したあの巨神なら、という期待と、このまま自分が居ても足手まといだという判断を、妹紅は冷静に認識した

「分かった。私は一旦『人里』まで退がる！」

全長40mはあろう巨神に聞こえているかは解らなかったが、巨神はこちらを一瞥した後再び異形に振り返ったのを確認して、妹紅は『人里』へと向かう。

ソウルゲインのコックピットで、生体反応が遠ざかるのを確認したアクセルは、永琳達や妹紅に使ったように外部スピーカーを介さずコックピット同士のみで行うプライベート通信でアルフィミイに問う

「アルフィミイ……と言ったな。貴様の言う“八雲紫”とやらが、おれと貴様をこの世界へと転移させたと言うのなら、奴ら“イエッツト”はどうやってこの世界に転移した？」

「それは先程も申し上げた通り、レジセイアを利用する世界を破界する者……その方の仕業と考えて下さって結構ですの」

アクセルとアルフィミイが会話している間にも、“イエッツト”は襲い掛かる。

が、飛び掛った骨型はソウルゲインのカウンターパンチで吹き飛ばされ

「疑問はそこだ。何故“アインスト”の成れ果てをこの転移させたのか、そして何故この世界なのか、だ」

「詳しい事は私にもよくわからないものがありますの。ですが、こ

れだけは知っていますの」

遠距離からビーム射撃を行った触手型の攻撃は、ペルゼインの両肩に浮かぶ鬼面——“鬼菩薩”の発するバリアによって弾かれ、その目と口から発せられたビームに吞まれ、触手型は消滅する

「その方は、この『幻想郷』の平行世界……“極めて近く、限りなく遠い世界”の住民。言わば“こちら側”の『幻想郷』を乗っ取りにきた侵略者……と言つことですよ」

「……平行世界……“こちら側”……か」

アルフィミイの語る侵略者——恐らく、アルフィミイが“八雲紫”から聞かされたのであろう——の存在
詳しい理由も境遇も知らないが、それはかつての自分達“シャドウミラー”とあまりに似ていて、アクセルは知らず苦い、自嘲の笑みを浮かべた。

異世界からの侵略……傍から聞けば、何とも奇怪で、そしてはた迷惑な話だった。

あのキョウスケ・ナンブ達も同じ気分だったかと、別な笑みが零れそうになったアクセルのソウルゲインのコックピットに

「……む？通信？“イエッツト”からだと……？」

謎の通信を知らせる、アラートが鳴り響いた

異形の呼び声（後書き）

もう忘れ去られてる感がマッハになってきた

いや、十中八九うp主のせいなんだけど

異形の呼び声 ？（前書き）

オイイイイイイ！？

更新3ヶ月以上放置ってちとsyれならんしょこれ……

壽屋のソウルゲイン組み立てたり、OGS久々にやってたとか言い訳言ってみたり

遅い！やっと更新したのか！来た！メイン作品更新来た！これで勝つる！

とか感想で言ってもいいんじゃないよ？（チラッチラッチラッ

異形の呼び声 ？

「ねえ、貴方達も別の世界から来たんでしょ？」

ソウルゲインのコックピットに、アルフィミイではない別の少女の
声が響く。

通信元の方へモニターを注視させると、そこには鎧型の“イエット”
の肩に乗る赤い目の少女が、こちらへ不気味に笑いかけている映
像が映し出される。

黒地の服に、金色の髪、黒い帽子

どのような手段でこちらへ通信しているのか、それはアクセルには
解らないが、今はそんなことを考える必要はなかった

「別の……？なら、貴女も？」

「そ。でも、貴方達と違って私達は“隣の”幻想郷からだけどね」

アクセルの代わりに、アルフィミイが答える。

鎧型以外の取り巻きは、残り二機ほど居たが、少女がソウルゲイン
に通信を入れたと同時に沈黙しているため、アクセルとアルフィミ
イは会話に集中できた

「どんなカラクリで話しているかは知らんが、何者だ貴様？」

「私はユキ。魔法使いよ、アクセル・アルマー。それに、アインスト・アルフィミイ」

「……！」

自分とアルフィミイの名を言った少女——ユキに、アクセルは驚いた。

ユキとの面識は無論無い。今、ここで初めて顔を見たはずであるのに、彼女は二人の異邦人の名を言った。そのことにアクセルは戸惑いを隠せなかった

「ではやはり、貴女方が“あの方”の仰っていた……」

「そう。アクセル・アルマーの方は違うみたいだけど、貴女は八雲紫から聞いているみたいね、アインスト・アルフィミイ」

しかし、アルフィミイは違った。

彼女がアクセルに話した、彼らをこの幻想郷に呼び寄せた“妖怪の賢者”八雲紫

アクセルは会ったことは無いが、その存在を知るアルフィミイは、その妖怪から何らかの話を聞いていたようで、ユキの素性にもある程度の見当はついているようだった

「ここに来たのは、アクセルの蒼き巨人の回収……そして、アクセルを抹殺、或いは洗脳して私を誘き出そうとした……」

「フフ……尤も、その巨人は貴女の“赤鬼”の修復と同時に姿を隠す為に転移させられ、アクセル・アルマーの方も隠密にやろうとしたけど、あの“妙な”人間に見つかっちゃったけど」

どどのつまり、ユキの目的は全て後手に回っていた。

恐らくは、何らかの手段でアクセル（と憑依していたアルフィミイも）の転移を知り、ソウルゲインを回収、パイロットのアクセルを抹殺（または洗脳）し、最終的にはアルフィミイを誘き出す

しかし、ソウルゲインは永琳達が発見、アクセルをコックピットから出した途端消滅（転移）し、『永遠亭』に匿われたアクセルも、ユキが『永遠亭』にたどり着く前に妹紅と鉢合わせになり、そのまま戦闘に入り――

そうして、現在に至る

「なるほどな……なら、貴様はアルフィミイを誘き出して、どうするつもりだった？」

「私自身、別に貴方や彼女に興味ないわ。私はただ命令を実行しよ

うとただけ」

「命令だと……？貴様個人の意思では無い、と？」

アルフィミイの言葉が頭をよぎる。

“イエッツ”は世界を破界する者達に利用されている。

ならば彼女に命令したのは、その者達が

アクセルはそう見当つけた

「もうその命令も果たせそうにないけどね。蒼き巨人も赤鬼も、パイロット共々復活し、何よりこれ以上やっただって“兵”を無駄にするだけだしね。だから……“帰るわ”」

特に名残惜しそうにもなくユキが言うと同時に、最初に“イエッツ”が出現した時のように、ユキの背後に『空間』が開かれた

(……………！あれは……！)

アクセルには見覚えがあった。

嘗て自分達も経験し、そしてあの“アインスト”達が行っていた現象

「“転移フィールド”か!?”」

「アクセル!」

「解っている!」

アルフィミイが叫ぶ理由は解っていた。あれは“転移フィールド”と呼ばれ、物体——主に機動兵器を“空間転移”させる際に発生する現象であった。

ユキは、この場から離脱するつもりであろう。無論、アクセルは逃がすつもりなどなかった。

両手を腰だめで上下に合わせ、エネルギーを集中させる。本来の20%にも満たない量で、アクセルは構わず、ユキを足止めするためにそれを放つ

「逃がすか!青龍麟!」

腰だめから一気に前方に突き出した両手から、青白いエネルギー波が放出される。

接近戦仕様のソウルゲインの武装（技）では最も射程が長いもので、離れていたユキの鎧型には最も有効だったが

「……逃がしたか」

被弾する前に、鎧型は消えた。
転移までには間に合わなかったのである。

取り巻きも同時に転移したのか、辺りには静寂が訪れていた。

アクセルは、アルフィミイのペルゼイン・リヒカイトに通信を繋げ、
そしてモニターの先で目を伏せているアルフィミイに、責めるでも
なく、優しく声をかけるでもなく、淡々と告げる

「……詳しい話はそこの『永遠亭』で聞く」

「……承知しておりますの」

刻は昼前

曇天が空を覆い始めていた

異形の呼び声 ？（後書き）

第二次OGの前に魔装機神出すとかSRプロ絶対忍者だろ…汚いな
流石忍者きたない

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9699r/>

スーパーロボット大戦ORIGINALGENERATION Episode『Fantasiewelt』“極め

2011年11月17日19時02分発行